

重なる石と言葉の裏に——田村毅氏講演会「ノートルダム・ド・パリ 聖母信仰と中世幻想」

報告 博多かおる

二〇一五年五月二十五日月曜日の十四時二十分から十七時三十分まで、途切れなく、田村毅氏は総合文化研究所会議室にてノートルダム・ド・パリと聖母信仰、中世幻想について語られ、パリと地方のカテドラル・ノートルダムの各時代の姿を比べ、引きはがし、建物の下にあるものを掘り起こし、聖母信仰と中世幻想のさまざまなあり方を聴衆の想像力の中に投射してくれた。

「カテドラル・ノートルダム」は各地にある。そこで人々が何をしてきたのか——「石の聖書」として教育の場になったり、巡礼者を泊めたり、待ち合わせ場所になったり、人々が絵画や音楽に触れる場所になったりした——、フランス中世の象徴となったカテドラルはなぜ大きくなっていったのか——人口の都市集中によって建造物の存在も巨大化した——などのお話をうかがうにしたいが、ノートルダム大聖堂と聖母信仰の関係も、しだいに複数の柱の周りに板をめぐるように浮かび上がってきた。十五世紀の詩人ヴィヨンの聖母への祈りなど、聖母にまつわる文学作品、音楽作品がそこに具体的な言葉の影、音の響きを加えてくれた。

十六世紀の作家ラブレールの『ガルガンチュア』でトゥールからパリに来たガルガンチュアが大聖堂の上から市民に挨拶し、

小便の雨を降らせる場面や、十九世紀の作家の小説ヴィクトル・ユゴー『ノートルダム・ド・パリ』に描かれた大聖堂とそこに存在する人々などにも光が当てられた。後者では、古典主義的な均整のとれた美よりも、ゴシック建築のいびつで奇怪な側面がはらむ想像力と生命力を讃美するユゴーの思考、「グロテスク」の美学が大聖堂を舞台に展開されていることを田村氏は述べられた。一八四五年よりパリのノートルダム大聖堂の修復工事を行ったヴィオレール・デュックの仕事を考察するうちに、ゴシック幻想、城塞、塔、怪物などのイメージが建築物に刻み込まれ、中世が再創造された経緯もあぶり出されてきた。さらにイシス神話についてもお話は展開されていた。サン・トウスタツシュ教会近くの庭で発見された女神の青銅製頭部がパリの守護女神だったイシスのものと判断され、「多くの者たちは、パリの市の名称は *Paris* に由来する、つまりパリ市がイシス神殿の近くにつくられたからだ」と信じている。それゆえパリ市の紋章には、イシスが乗ってこの地にやって来た「舟」が描かれているのである¹。というモレリ『歴史事典』からの引用や地図などをもとに、大聖堂の下に眠る異教の女神への信仰の跡を田村氏の言葉とともに聴衆はたどった。

こうしたお話から、私たちは堂々たるカテドラルの影に、今

や神話や文学作品、資料や科学的分析の結果を通して集団的記憶のかたに思い浮かべるしかない過去の建造物の残像をかいま見たり、聖母信仰の裏に異教の女神たちの姿がちらつくの眺めたりする。聴衆は学生、教員のみならず学外の方も多く、三時間を超える講演と質疑応答は大聖堂の建築の陰にあるものとそれが照射するものをさらに追いたいという好奇心をかきたててくれた。

註

- 1 Louis Moreri (1643-1680) ; *Le grand dictionnaire historique, ou Le mélange curieux de l'histoire sacrée et profane*. Tome 6 (H-L) / ... par Mre Louis Moreri, ... Nouvelle édition, dans laquelle on a refondu les Supplémens de M. l'abbé Goujet, le tout revu, corrigé et augmenté par M. Drouet -les Libraires associés (Paris)-1759 (Slackin Reprints, 1995). cf. Gallica ; «Ists», p. 446.

講演会
ノートルダム・ド・パリ
聖母信仰と中世幻想
田村 毅先生 (東京大学名誉教授)



2015年5月25日(月) 14時20分~17時30分
東京外国語大学 研究講義棟 422 (総合文化研究所会議室)

東京外国語大学 総合文化研究所
問い合わせ先 : hakata@uifs.ac.jp (博多かおる)
来聴自由